



Title	シンガーによるロールズの反照的均衡批判
Author(s)	金, 雲龍
Citation	研究論集, 23, 1 (左) -24 (左)
Issue Date	2024-01-25
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgshhs.23.l1
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/91082
Type	departmental bulletin paper
File Information	03_rjgshhs_23_p001-024_l.pdf



シンガーによるロールズの反照的均衡批判

金 雲 龍

要 旨

この論文は、ピーターシンガー (Peter Singer) によるジョン・ロールズ (John Rawls) の反照的均衡の批判を論じている。ロールズが反照的均衡の概念を紹介して以来、今でも有力な道徳的正当化の方法の一つとして取り上げられている。シンガーは反照的均衡を批判する代表的な学者の一人であり、現在もこの立場を維持している。この論文では、熟考された判断 (常識道徳)、記述・当為 (is-ought) の問題を中心にシンガーの立場を紹介する。次に、シジウィックの‘The Methods of Ethics’に対するシンガーとロールズの解釈の違い、そしてシンガーの‘The Expanding Circle: Ethics, Evolution, and Moral Progress’を主題とし、反照的均衡が正当化されない理由は何かを論じるのが本論文の要旨である。

初めに

ロールズは道徳的正当化の方法の一つとして反照的均衡を提示する。反照的均衡とは、我々の熟慮された判断と道徳理論の間に均衡状態が成立することである。シンガーは反照的均衡を批判する代表的な学者の一人である。シンガーは大きく分けて二つの理由から反照的均衡を批判する。

第一に、道徳理論がある集団が作った、あるいは合意した道徳的判断に対してテストされるべきだという観点へ簡単に陥るということである。シンガーは、反照的均衡で「道徳理論の妥当性は、理論をテストする熟考された判断が誰のものであるかによって異なるため、ある理論が客観的に妥当だと言うことはできないことになる」と主張する。もし、二つの異なる社会で、かなり異なる熟考された判断のセットを持っている場合、異なる道徳理論が妥当なものとされる可能性がある。またすべての人が道徳的判断を共有すると仮定しても、これは単に理論が相互主観的 (intersubjective) な妥当性を持つことを意味するだけで、客観的な妥当性ではないと

批判することができる。

そして第二に、相容れない特定の判断を保持しながら矛盾なく道徳理論を受け入れることができないとき、反照的均衡は我々の特定の道徳的判断に過度な重みを置くということである。反照的均衡では最初の道徳的判断が正当性を判断する重要な資料として活用される。シンガーは、「初期の道徳判断を生（なま）のデータ（raw data）だと仮定し、もっともらしい理論を道徳判断に合わせようとするが、もしこれが不可能であれば、他の道徳判断に合うように理論を修正する」と述べる。このような観点から「道徳理論の受容可能性は理論自体の内部の整合性（coherence）と妥当性（plausibility）によって決定されるのではなく、我々が修正したり諦めたりしたとしない、以前から持っていた道徳判断との一致によって相当決定される」というのがシンガーの主張である。

シンガーの主張が正しければ、反照的均衡は既存の熟考された道徳的判断と一致する信念を維持及び保存する消極的な役割を果たすだけで、現在の観点を根本的に変化させることは難しいと考えられる。つまり、反照的均衡は保守的（conservative）だと考えることができる。

この論文では、ロールズの反照的均衡とそれを批判したシンガーの立場を論じる。この論文の目的は、反照的均衡が記述的な作業なのか規範的な作業なのかが明確ではないことを示すことである。シンガーは反照的均衡が科学理論をテストすることと同じであり、一種の記述的な作業であると主張する。これを検討するために、まずロールズの反照的均衡を説明し（第1章）、上記したシンガーの反照的均衡の批判の詳細を論じる（第2章）。

次に、熟考された判断をどのように扱っているかを見るために、シジウィックに対するロールズとシンガーの解釈の違いを論じ（第3章）、二人が熟考された判断をどのように扱っているかを見ることにする。シジウィックは常識道徳を中心に主張を展開するが、常識道徳をどのように扱っているのかについてロールズとシンガーの立場は異なる。ロールズはシジウィックが反照的均衡の方法を使用したと見ている。ロールズが提示する反照的均衡の方法は、多数の熟考された判断と道徳理論の間の均衡をはかるというものである。シジウィックが『倫理学の方法』で常識道徳を根拠に功利主義を正当化しているというのがロールズの解釈である。ロールズの立場からはシジウィックの功利主義の正当化は反照的均衡の方法に属する。

一方、シンガーはシジウィックの作業が単に直観主義に対する対人論証（ad hominem argument）であり、シジウィックは基礎づけ主義の立場から功利主義を展開したと主張する。シンガーによると、シジウィックの『倫理学の方法』は正当化の作業ではなく、調査作業（investigatory work）に過ぎない。また、シジウィックは常識道徳ではなく、直観から導き出した公理（axiom）を基礎に置く。この公理（axiom）に基づいて導き出されるのが功利主義であるというのがシンガーの解釈である。ロールズの解釈との違いがどのような含意を持っており、反照的均衡に反対する理由になりうるかを示すことを試みる。

最後に、シンガーが科学と倫理学をどのように扱っているのかを論じ、記述的領域と当為の

領域がどのように区別されるべきかを論じる（第4章）。シンガーが反照的均衡を批判する最大の理由は、反照的均衡が科学理論をテストすることと同じだということである。伝統的に科学は事実の領域、倫理学は当為の領域で扱われてきた。この違いは何を意味するのか、そして、この違いの区別によって反照的均衡がいかに解釈されるかを論じる。結論として、我々はより良い倫理的判断のために反照的均衡の方法を使うことができる。しかし、反照的均衡の方法を使用したからといって、その決定が倫理的にすべて正当化されるとは言えないと私は主張したい。

1. ロールズの反照的均衡 (Reflective equilibrium)

反照的均衡は熟考された判断と道徳理論の間に均衡を取り、判断と原理のバランスを通して一種の正当化を試みるというロールズの主張である。ジョン・ロールズ (John Rawls) は『正義論』で正義感覚を説明する際に重要なのは、正義の概念に照らした判断ではなく反照的均衡からの判断だと主張する。反照的均衡は、我々が持っている道徳的能力を重視することだと考えられる。

理性はほとんどの人間が共有する能力であるが、判断は個別に行われる。また、ロールズが主張する反照的均衡は正義感覚と関連するため、倫理学として主観的な側面をどのように解決できるかについての説明を必要とする。正義感覚は我々が個別的に持っている感覚であり、どのように正義感覚が反省の過程を経て客観的に正当化されるのかが不明確だからである。

正義感覚は道徳 (moral) に属するというより、道徳性 (morality) に属し、我々の本性に内在していると考えることができる。つまり、ある意味で正義は客観的、正義感覚は主観的なものとして捉えることができる。しかし、本性に従って生きることと、本性に従って生きなければならないことには違いがある。我々が何らかの感覚を持っていて、この感覚に従って行為すべきだと言うのは、自然主義の誤謬に陥るからである¹。そこで、道徳性を正当化する過程が必要であり、ロールズが提示する方法が反照的均衡である。この章ではロールズの反照的均衡とその根拠となる熟考された判断の定義を紹介する。

ロールズは反照的均衡の概念について次のように述べている。

ある人が自分の正義感覚について直観に訴える説明を（たとえば、妥当で無理のないさまざまな推定を体現するものを）与えられたとしよう。この場合、その人は自分の既存の判

¹ 自然主義の誤謬を誤謬として受け入れない立場もかなりある。しかし、後に述べるシンガーの立場が事実と規範 (is-ought) の間に隙間があると主張しているため、私もそれに従って事実と規範の間に隙間があることを前提に議論を進める。詳細は4章で議論する。

断と正確には合致しない理論であったとしても、その理論の諸原理に従わせるべく判断のほうを修正することが当然起こりうる。こうした修正がなされる可能性が特に高いのは次のような場合であろう。すなわち、[本人が陥っていた] もろもろの偏向についての説明が見つかり、彼の元来の判断への確信が揺らいだり、本人に提示された構想が今や受容可能だと思われる判断を生み出したりといった場合がそれである。道徳理論の観点からすると、ある人の正義感覚の最善の説明とは、本人が何らかの正義の構想を吟味する前から抱いている諸判断と合致するようなものではなく、むしろ〈反照的均衡〉における本人の諸判断と適合するものにほかならない。すでに述べたように、この均衡状態は、提案されたさまざまな構想を比較考量した後に到達するものであり、ある場合は諸構想のひとつと一致させるために自分の判断の方を修正したり、他の場合は当初の確信（およびそれらに対応する構想）をしっかりと固守し続けることになる²。

ロールズが提示する反照的均衡の方法は、個人が複数の見解を受け入れながら自分の判断を維持または修正することであるため、個人の判断の整合性が基礎になると考えることができる。反照的均衡の過程を経て、我々の熟考された判断と様々な道徳理論の均衡を図る。そして、この均衡状態に従い、自分の判断を修正するかあるいは元の判断を維持するかを決めるのが反照的均衡の方法である。

反照的均衡は、何らかの第一原理を前提する必要はない。反照的均衡は第一原理を証明する方法ではなく、我々の道徳的判断と道徳原理の間の整合性に訴える方法だからである。しかし、整合性に道徳的正当化の根拠を求めるため、どんな判断が正当なのかに対する基準を示す必要がある。ロールズはこれを熟考に任せる。ロールズが提示する熟考された判断は次のようなものである。

〈しっかりした判断〉は正義感覚の行使に好都合な条件のもとで、したがって過ちを犯した場合に通常なされる言い訳や釈明が通用しない状況において下された判断にほかならない。……さらにこれらの判断を見分ける規準は、恣意的に定められたものではない。実際、そうした規準は「道徳的判断だけでなく」どのような種類の〈しっかりした判断〉をも選り抜く規準とよく似ている。そしていったん私たちが、思考力の行使をも含んだ知的能力のひとつとして正義感覚を見なすようになれば、関連する判断は熟考や判断一般にとって好都合な条件のもとで差し出されるものとなる³。

² John Rawls, "A Theory of Justice", Revised Edition, Harvard University Press, 1999, pp. 42-43. ; ジョン・ロールズ (2010), 『正義論』, 紀伊国屋書店, p. 68

ロールズは熟考された判断を正義感覚の行使に好都合な条件下で下された判断だと説明している。我々には実際に日常生活の状況の下で道徳的判断を下す。もし統合失調症のような精神的な症状を持っている場合など、きちんと反省の過程を経ることができない状況にいれば、正義感覚の行使に好都合な条件ではないと考えることができる。

このように日常生活で我々が下すすべての判断がまともな判断だとは考えられない。したがって、適切な判断に何が必要なのかを示す必要がある。ロールズは熟考された判断から除外される例として躊躇しながらなされた判断、ほとんど確信を持ってない判断、気が動転したりおびえている状態での判断や何らかの仕方でするような場合に下される判断などを挙げる⁴。これらの条件は、上記に引用した適切な判断のための基準となるだろうが、その他の要素も十分に含まれる可能性がある。

1.1 反照的均衡と正義感覚の関係

私は今まで熟考された判断を主観的なものとして扱ってきた。しかし、反照的均衡を扱う際に注意しなければならないのは、反照的均衡の対象が個人の熟考された判断ではなく、我々の熟考された判断であるということである。ロールズは様々なところで、反照的均衡の状態における我々の熟考された判断に訴えている。反照的均衡の状態の対象となるのは、主観的な判断ではなく、多数の熟考された判断であると考えることができる。多数の熟考された判断と道徳理論との間の均衡状態を成そうとするのが反照的均衡の目的であるといえる。

私はこの論文で正義感覚を主観的なものとして扱う。その理由は、正義論の目的にある。ロールズは正義論が「〈道徳感情 (moral sentiment) の一つの理論〉であって、私たちの道徳的な能力—あるいはもっと厳密に言うと、私たちの正義感覚—を律している諸原理を詳説しようとする」と述べる⁵。ロールズが提示する我々の正義感覚は、もちろん多数の人の正義感覚である。多数の人に一貫した特性として現れる正義感覚はもちろん共通点を持っている。しかし、あくまで正義感覚そのものは個人が持っているものとして考えることができる。我々が持つそれぞれの直観、そしてそれに基づくそれぞれの熟考された判断を多数の熟考された判断に帰属させる必要がある⁶。

また、『正義論』では正義感覚がある程度、心理学的に扱われている。ロールズは『正義論』第8章で正義感覚について論じる。この章でロールズは、人が正義感覚をどのように獲得し、どのように発展させていくかを説明する。ロールズの立場から正義感覚の発展と関連して論じ

³ Ibid., p. 42.; 邦訳は pp. 67-68。ここで〈しっかりした判断〉と熟考された判断は‘considered judgement’の訳語である。そして、この訳語を用いるのは第3章で‘prudence’を熟慮と訳したことと区別しようとするためでもある。

⁴ Ibid., p. 42.; 邦訳は p. 67。

⁵ Ibid., p. 44.; 邦訳は p. 70。

られる要素は、主に秩序だった社会、正義の構想、正義感覚である。

ロールズは、道徳的発展の過程を記述するにあたり、秩序だった社会（well-ordered society）という状態を前提としている。秩序だった社会は、「成員の利益を増進するようもくろまれ、公共的な正義の構想（conception of justice）によって事実上統制されている社会」である⁷。秩序だった社会にいれば、各個人が正しく道徳的な発展を進めることができるということである。

ここで重要なのは、公共的な正義の構想である。秩序だった社会がどのようなものであるかは、正義の構想に依存する。そして、秩序だった社会が維持されるためには、正義の構想がある種の安定性を持たなければならない。正義の構想は、社会契約論、功利主義、完全主義など様々な正義の構想がある。このうち、ロールズは公正としての正義が最も安定性が高いと主張する。

ロールズは、「道徳心理学の原理がその構想に基づいて行為したいという不可欠の欲求を人間の中に生み出せないようなものであるならば、当該の構想には重大な欠陥がある」と主張する⁸。ロールズが提示する公正としての正義が理論として正当化されることと、個人の観点からそれをどのように受け入れ、発展させるかは異なると考えられる。もし人間が公正としての正義と反対の傾向性を持っていると仮定すると、正義の構想の安定性が低くなると考えられる。そこで、ロールズは『正義論』の第75節で他の正義の構想に比べ、公正としての正義が道徳心理学的に人間にもっとも合うと主張する。

ロールズの理論の中で道徳心理学的に説明される正義感覚は、「少なくとも正義の原理が道徳的観点を規定する限りにおいて、その観点を採用しその観点に基づいて行為したいと欲する、確固たる性向・構え（disposition）」である⁹。様々な公共的な正義の構想の中で、公正としての正義が最も安定性が高いというロールズの主張は、公正としての正義が単なる短期的なものではなく、長期的にも人間に最も合うことを示唆している。

『正義論』において正義感覚は一種の傾向性として主観的なものとして扱われており、不正義に対する性向の反対の性向であると考えることができる。ロールズが正義感覚を道徳心理学的な側面で扱っているのは、他の正義の構想に比べ、公正としての正義が持つ主観的な側面での相対的な安定性を説明するためだと考えることができる。

そしてロールズが提示する反照的均衡は、正義感覚と関係している。ロールズが熟考された

⁶ ロールズは直観主義を批判するが、直観を完全に排除することを要求しない。

どのような正義の構想であっても、ある程度まで直観に依拠せざるをえないことは、疑いようがない。

Ibid., p. 36.; 邦訳は p. 59。

⁷ Ibid., p. 397.; 邦訳は p. 595。

⁸ Ibid., p. 398.; 邦訳は p. 596。

⁹ Ibid., p. 430.; 邦訳は p. 643。

判断を正義感の行使に好都合な条件のもとで下された判断と定義しているため、正義という概念よりむしろ正義感が反照的均衡の主な条件として使われている。正義感を条件とすることは、二つの問題を引き起こす可能性がある。

第一に、熟考された判断の条件が、正義感の行使に好都合な条件として定義されているということである。正義感の行使に好都合な条件というのは、それが常に完璧に行われないことを仮定していると考えることができる。どのような状況に置かれているのかを完璧に知ることができる人はいない。結局のところ、どのような状況にあるのかについて判断することも、恣意的な判断になる可能性がある。ロールズが提示する熟考された判断の基準がどのように解消されるのかについて、さらなる議論が必要と考えられる。

ロールズ自身も「出発点に据える判断あるいは熟考・反照の理路自体が、我々が最終的に到達する[均衡の]静止点に影響を及ぼす」ことを認めている¹⁰。この影響が良い影響なのか、悪い影響なのかを把握するのも個人の判断、究極的には多数の判断によって異なる場合がある。そこで、ロールズが提示する熟考された判断の条件の定義が不明確であるため、どのような判断を熟考された判断とすることができるのか確定できないと批判できる。

第二に、反照的均衡は、道徳理論の観点からある人の正義感の最善の説明の方法として提示されている。もちろん、ロールズが反照的均衡を道徳感の説明としてのみ使用すべきだと言っているわけではない。しかし、伝統的に倫理学は「一をすべきである」という当為の領域として記述的な領域と独立して扱われてきた。その理由は、事実から価値を導き出すという自然主義の誤謬に陥るからである。反照的均衡が我々の正義感を説明するための方法であれば、記述的な領域と当為の領域の区分をどうすべきかを提示できなければならないと考えられる。

2. シンガーの反照的均衡批判

第1章ではロールズの反照的均衡を紹介し、反照的均衡において我々の直観あるいは熟考された判断が問題になる可能性があることを論じた。反照的均衡において熟考された判断は直観の要素を含んでいるが、熟考された判断が理性から切り離されているとは考えにくい。この点は、ロールズが提示する熟考された判断が直観の領域に属するのか理性の領域に属するのかを不明瞭にする。しかし、正義感の行使に好都合な条件を前提とするロールズの立場が、直観が熟考された判断に影響を与えると仮定していることは明らかである。

そして、多数の熟考された判断によって修正しなければならないのは、自分の直観あるいは熟考された判断である¹¹。この章では、反照的均衡の方法と熟考された判断を批判したシン

¹⁰ Ibid., p. 44. : 邦訳は p. 69-70。

ガーの立場を論じ、どのような点で熟考された判断を基準にすることができないのか、そして、なぜ反照的均衡は記述的な作業に属するのかを説明する。

2.1 直観と熟考された判断に対するシンガーの批判

ピーターシンガー（Peter Singer）は、『正義論』におけるロールズの「その理論（道徳理論）が推測する原理と照らし合わせうる事実の、有限だが明確な集合が存在している。この集合こそ、反照的均衡における私たちの熟考された判断にほかならない」という主張を批判する¹²。シンガーはこれに対して規範となる理論が、人々が通常行う道徳的判断とどの程度一致するかによって、その理論を検証することはできないと主張する。シンガーが反照的均衡に反対する理由は大きく分けて二つあると述べるが、その理由は以下の通りである。

道徳哲学の反照的均衡の構想は、我々が特定の道徳理論をテストされるためのデータとして考えるように誘導することによって、二つの点で誤解を招きやすい：第一に、それは道徳理論がある集団や合意によって作られた道徳的判断に対してテストされるべきだという観点へ簡単に陥る。どの集団の判断にも規範的重要性を付与することはできない；第二に、たとえ「反照的均衡」の方法は、相容れない特定の判断を保持しながら矛盾なく道徳理論を受け入れることができない、ということ以上のことを言わないとしても、我々の特定の道徳的判断に過度な重みを置いてこの真実を語る傾向がある¹³。

まず、第一に、「集団や合意によって作られた道徳的判断に規範的な意味を与えることができない」ことである。反照的均衡の方法は、正義感覚を説明するための方法であるが、正義感覚は個人あるいは多数が持つものでもあり、個人や集団によって異なるものである。熟考された判断が正義感覚の行使に好都合な条件の下でなされた判断であれば、個人や集団によって熟考された判断にも差が生じると考えることができる。

シンガーは、反照的均衡で「道徳理論の妥当性は、理論をテストする熟考された判断が誰のものであるかによって異なるため、ある理論が客観的に妥当だと言うことはできないことになる」と主張する¹⁴。もし、二つの異なる社会で、かなり異なる熟考された判断のセットを持って

¹¹ ロールズが提示する反照的均衡は解釈の余地はあるが、あくまで集団的な方法である。これに対し、シンガーはロールズが提示する反照的均衡を個人的なものとして扱っているため、反照的均衡における概念の違いが存在すると考えられる。しかし、この論文は反照的均衡に対する批判が目的ではあるが、シンガーの立場を説明することも目的であるため、反照的均衡を個人的な方法として扱うことにする。

¹² Ibid., p. 44. : 邦訳は p. 70-71。

¹³ Peter Singer, 'Sidgwick and Reflective Equilibrium', *The Monist*, Vol. 58, No.3, 1974, p. 517.

いる場合、異なる道徳理論が妥当なものとされる可能性がある。すべての人が道徳的判断を共有すると仮定しても、これは単に理論が相互主観的（intersubjective）な妥当性を持つことを意味するだけで、客観的な妥当性ではないと批判することができる。もし、人々が異なる判断を下したとしたら他の理論が妥当になる。

また、道徳理論が社会と関係なく、個人より大きな集団の熟考された判断と必ず一致しなければならないかは疑わしい。例えば、すべての男性に共通する反照的均衡の状態が存在するかどうかについて考えてみよう。共通の反照的均衡の状態を持つことができないと仮定するのは意味がない。なぜなら、単純に均衡状態に至らなかったからである。この場合、反照的均衡は失敗したことになり、熟考された判断と道徳理論も一致しないと考えることができる。反対に、共通の反照的均衡の状態を持つことができると仮定すれば、例えば男性にのみ妥当な反照的均衡の状態で選択される道徳理論は男性にのみ妥当な理論として見なされる。この場合、選択される道徳理論はすべての男性の間で相互主観的であると言える。また、女性がこのような男性の熟考された判断や道徳理論をそのまま受け入れるべきかどうかについては議論の余地があるということになる。

ロールズの『正義論』において、正義感覚を発展させていく上で重要なのは、秩序だった社会、そして公共的な正義の構想である。どの社会が秩序だっているかを判断する基準は、公共的な正義の構想がどれだけ安定しているかと関連している。しかし、実際に安定性を確認できるかどうかは難しく、少なくとも『正義論』における正義感覚の発展の説明は、秩序だった社会という状況を前提としている。上記の例で、異なる二つの社会の妥当性の両方を認めるか、社会と関係なくより大きな集団を想定する場合にも、どちらを優先するべきかは明確ではない。このような場合、ある集団や合意に関係なく成立する妥当性が必要になると考えられる。

シンガーは、ロールズが「（正義論の）読者が自分の直観を共有していると仮定する確信は、例えば何が正義で何が不正義かについて広い合意があるという仮定に基づいているとしか思えない」と主張する¹⁴。正義感覚を直観、熟考された判断を理性の領域と仮定し、すべての人が直観を共有していると仮定しなければ、理性を通したとしても、同じ結論に至ることができるのかに対する疑問が生じる。

これらの疑問は、秩序だった社会という理想的な状況を前提とした場合に起こりうる問題であると考えられる。実際に秩序だった社会から導き出される正義感覚は理想的なのか。また、理想的な正義感覚を持っていれば理想的な熟考された判断が可能なのか。秩序だった社会と、直観と熟考された判断の間の繋がりが明確でないことを批判することができる。

たとえば、ジョナサン・ハイト（Jonathan Haidt）は、道徳的判断を下す時、感情がなければ正

¹⁴ Ibid., p. 494.

¹⁵ Ibid., p. 495.

しく判断することができず、理性は判断を下した後、その判断を合理化するだけだと主張する¹⁶。ハイトの立場によれば、我々の道徳的立場を変えることは非常に難しいことになる。理性が単に合理化の役割としてのみ使われるということは、感情を超える判断が不可能であり、またこの判断を変える力がないことを意味することになる。

そして、ジョシュア・グリーン (Joshua Greene) は集団内の道徳と集団間の道徳を区別し、進化を経て我々が得た直観は集団内の道徳までであり、集団間の道徳は進化の過程で与えられたものではないと主張する¹⁷。グリーンが正しいならば、正義感覚という我々の直観は集団内までしか適用できないという結論に至る。このことは我々が直観を共有しているというロールズの過程は、集団内に対しては正しいが、集団間に対しては正しくないことを意味する。また、集団を超え、すべての人間が直観を共有しているという仮定はさらに信頼性を失うことになる。

熟考された判断に対する心理学的、脳科学的な結果は、我々に合意に至ることが難しいから合意を放棄すべきだという当為的な主張まで可能にするのではない。しかし、少なくともロールズが前提としている直観の共有が非常に難しいことを示す実証的な結果だと考えることができる。

第二に、熟考された道徳判断と道徳理論の間で、熟考された判断の方に過度の重みを置くという批判である。シンガーは反照的均衡が一種の科学理論をテストすることと似ていると述べる。科学では、一般的にデータに最も合う理論を受け入れるが、時には理論が本質的にもっともらしい場合、データに最も合う理論でなくてもその理論を受け入れる。科学理論であれば、データに合わない時に他の仮説を導入するように、なぜそのデータが間違っているのかを説明することができる。

この場合、最初の道徳的判断は正当性を判断する重要な資料として活用される。シンガーは、反照的均衡で「初期の道徳判断を生 (なま) のデータ (raw data) だと仮定し、もっともらしい理論を道徳判断に合わせようとするが、もしこれが不可能であれば、他の道徳判断に合うように理論を修正する」と述べる¹⁸。道徳理論と残りの判断の妥当性が均衡状態を取れば、最善の理論を持つことになる。

ところが、熟考された判断が妥当性を判断するのに十分な資料なのかという疑問が残る。初期の熟考された判断を X、反照的均衡を経た熟考された判断を X'、道徳理論を Y、反照的均衡を経た道徳理論を Y'、均衡状態を Z と仮定してみよう。反照的均衡を経て生じる X と X' の違

¹⁶ Jonathan Haidt, “The Righteous Mind: Why Good People are Divided by Politics and Religion”, Vintage, 2012, Part 2, Sec 5, “Seeing-That” Versus “Reasoning-Why”.

¹⁷ Joshua Greene, “Moral Tribes: Emotion, Reason, and the Gap Between Us and Them”, Penguin Press, 2013, p. 23.

¹⁸ Peter Singer, ‘Ethics and Intuitions’, *The Journal of Ethics*, 10 Vol. 91, Iss. 3-4, 2005, p. 344.

いは大きくないと考えられる。なぜなら、初期の道德判断のうち、反照的均衡を経た後残る熟考された判断が X' であるからである。 X' が X の部分集合であると仮定すれば、反照的均衡を通じて均衡状態である Z に到達し、道德理論 Y が Y' に変わったとしても、その変化は大きくないと考えることができる。

一方、別の見方から考えると、 X と X' の違いに意味があると主張することができる。しかし、 X と X' に違いの意味があると仮定する場合、この違いが道德理論を変えるほどの役割を果たすことができるのかという疑問が残る。例えば、初期の道德判断である X から帰結主義という Y に従う均衡状態 Z に至ったと考えてみよう。この場合、 X は反照的均衡を経た X' を持っていて、 X' も結果主義を認めていると考えられる。この場合、以後の反照的均衡を経て帰結主義をより洗練させる Y'' 、 Y''' …あるいは X'' 、 X''' …を得るかもしれない。しかし、このような X らあるいは Y らが非帰結主義を支持するというまったく異なる道德理論を支持するとは考えられない。結果として、 X と X' の違いも意味があると考えられない。

このような観点から「道德理論の受容可能性は理論自体の内部の整合性 (coherence) と妥当性 (plausibility) によって決定されるのではなく、我々が修正したり諦めたりしたがる、以前から持っていた道德判断との一致によって相当決定される」というのがシンガーの主張である¹⁹。シンガーの主張が正しければ、反照的均衡で熟考された判断と道德理論が一致しないとき、以前から持っていた道德的判断を支持する決定が下される。

また、上で論じたように、反照的均衡は正義感覚の行使に好都合な条件下で下された熟考された道德的判断から始まる。ところが、すでに好都合な条件下で自信を持って下されたこのような判断は、他の判断や原理に比べて相対的な優位を占めると考えられる。反照的均衡は熟考された道德的判断を維持するのに有利に働く可能性が高い。

反照的均衡の方法は他の要素との相互調整の過程を経ながら進められるだろうが、既存の熟考された道德的判断と一致する信念を維持及び保存する消極的な役割を果たすだけで、現在の観点を根本的に変化させることは難しいと考えられる。たとえ熟考された道德的判断が修正されとしても、その判断の核心は維持しつつ、些細な周辺の修正に満足するかもしれない。つまり、反照的均衡は保守的 (conservative) だと考えることができる。

反照的均衡は保守的だという批判が妥当であるならば、熟考された道德的判断に強い確信を持てば持つほど、反照的均衡は機械的に行われると考えられる。反照的均衡を洗練させたドポールもこの点を指摘している。ドポールは「いったん最初の熟考された道德的判断が何であるかが決定されれば、倫理問題に関連する合理的能力を持つ人なら誰でも、さらには機械でさえも、反照的均衡の過程を実行することができる」と述べている²⁰。すべての道德的事項が熟考された判断を維持あるいは保存することに都合よく調整するのが反照的均衡だということ

¹⁹ Ibid., p. 345.

ある。

2.2 反照的均衡の記述的な側面に対する批判

シンガーは規範についての道徳理論と科学理論は異なると主張する。科学理論は生のデータを説明するための理論である。反照的均衡では、この生のデータが道徳的判断であり、道徳的判断によってもっともらしく説明される道徳理論が選択される。しかし、規範について道徳理論は我々の道徳判断を説明するための理論ではなく、「我々は何をすべきか」という問いに答えるための試みである。「我々は何をすべきか」は当為の問題であるため、科学理論をテストすることとは異なると考えられる。もし反照的均衡が科学理論をテストすることと同じだというシンガーの批判が正しいとすれば、反照的均衡もまた、「一である」から「一すべきである」を導き出すという自然主義の誤謬に陥ることになると考えられる。

シンガーは、ロールズの反照的均衡を一種の記述的作業とみなす。ロールズの反照的均衡が一種の記述的作業であると考えられる理由は、ロールズが道徳と言語の類似性を比喩的に表現し、我々がいかに言語を使うことができるかを探求する目的は我々の言語能力を明らかにすることであると説明したことである。シンガーが批判しているロールズの主張は次である。

ここで、母語の文章に対して私たちが有している〈文法性の感覚〉を記述するという問題と比較するのが役に立つ。この場合の達成目標は、母語を話す者と同じ識別をする明瞭に表現された原理を定式化することを通じて、適格な文章を認識する能力を特徴づけることにある。そうした取り組みには、明白な文法上の知識に関する場あたりの指針の域をはるかに超える、理論的な構成・解釈が必要とされることが知られている。同じような事情がおそらく道徳理論についても当てはまる²¹。

道徳理論の正当化を母語の文法規則を明らかにする作業に例えることは、反照的均衡の方法を記述的に解釈する余地を残す。上の引用でロールズが示しているのは、あくまでも〈文法性の感覚〉を記述することが目的であるということである。我々が言語を使用する上で使用する能力はどのようなものであるかを記述することは重要な問題かもしれない。しかし、我々が特定の言語能力を持っているということは、それに従って行為しなければならないという規範性を明らかにする問題とは別の問題だと考えることができる。

例えば、あるXという人物が今後「あのリンゴを赤い」と言うと言明したとする。記述的な

²⁰ Michael R. DePaul, 'Two Conceptions of Coherence Methods in Ethics', *Mind*, Vol. 96, No. 384, 1987, p. 466.

²¹ John Rawls, "A Theory of Justice", p. 41.; 邦訳は p. 66。

作業からは「Xの文法性の感覚が間違って使われた」と記述できる。しかし、我々が持っている文法性の感覚についての記述は単に事実を表しているに過ぎない。Xは依然として「あのリンゴを赤い」と言うことができ、我々は「Xの文法性の感覚が間違って使われた」と記述することができる。

もし、Xに「あのリンゴは赤い」と言うべきだと要求するには、「文法性の感覚に従って言うべきである」という規範的な主張が伴わなければならない。これは「Xの文法性の感覚が間違って使われた」という記述で要求できるものではない。いかに行為するべきかという規範とは別の問題と考えることができる。

このように反照的均衡を記述的な作業と解釈すると、我々の熟考された判断が恣意的な判断であるということと独立に、自然主義の誤謬に陥ると批判できる。ロールズの比喩に従えば、道徳理論の正当化の作業は、我々が下す判断を観察し、記述することと似ているように見えるからである。しかし、何かを記述する作業と何かを正当化する作業との間には、明確な境界線があると考えることができる。

したがって、反照的均衡が記述的な作業に属し、我々がどのように熟考された判断を下すかを説明できるからといって、これが正当化されるのではない。熟考された道徳判断は、記述的な作業である反照的均衡に含まれる観察資料に過ぎないと主張することができる。上で論じたように、ロールズは正義感覚を道徳心理学の観点から扱っている。しかし、我々の道徳的な心理現象を説明したり、共有する道徳判断を確認する作業が意味を持つことは確かである。しかし、記述的な作業を通じて規範的に妥当な理論に到達することは、非常に困難な作業になると考えることができる。

3. シジウィックの『倫理学の方法』に対するシンガーとロールズの解釈の違い

シンガーは反照的均衡を批判する上で、道徳理論を単に我々の特定の道徳的判断をテストするためのデータだと考えるように誘導している、という最も重要な点を指摘した。このような道徳理論の理解は、道徳理論が我々の道徳的能力を説明しようとする試みであるという見方に基づいている。そして、この試みが記述的な作業に属するだけで、規範的な作業ではないというのがシンガーの批判であり、その中心には熟考された道徳判断がある。

しかし、ロールズの議論から「熟考」と表現される理性的要素を取り除くと奇妙な主張になる。誰も熟考なしに何らかの判断に至ることはできないからである。また、ロールズが根拠としているのはあくまで熟考された判断であり、正義感覚ではない。熟考された判断は直観の要素を含むかもしれないが、それでも理性の領域であると解釈することができる。

この章では、ロールズが提示する熟考された判断が直観を含むことを明確にするために、シジウィックの『倫理学の方法』に対するロールズとシンガーの解釈の違いについて論じる。こ

の過程を通じて、反照的均衡を経ない熟考された判断は正当化されていないことを説明する。ロールズは、反照的均衡の方法がシジウィックの方法と同じものであり、すでに古い歴史を持つものであると述べる²²。シジウィックは、常識道徳に対する体系的な反省のためには常識道徳の体系のさらなる発展が必要であることが証明され、同じ反省を通じて功利主義の原理が、常識道徳が自然的に訴える原理として提示されれば、功利主義の証明は完全なものとなると主張する²³。

3.1 ロールズによる『倫理学の方法』の解釈

ロールズは我々の道徳的能力を説明し、熟考された判断と道徳原理の間の相互支持と調整を通じて妥当な道徳原理を正当化する。同様に、シジウィックの完全な証明では、功利主義と常識道徳からの判断の間の肯定的な関係を展開しながら互いの妥当性を補完している。つまり、功利主義と常識道徳の間の反照的均衡の状態に進むことを「最も完全な証明」と見ている。

シュニーウィンドによると、シジウィックの功利主義の証明は二つの段階を経て行われるが、それぞれの段階は「依存性論証 (dependence argument)」と「体系化論証 (systematization argument)」と呼ぶことができる²⁴。まず、依存性論証は、常識道徳の規則が独断的 (dogmatic) 直観主義者の信念とは異なり、自明なものではないことを示す試みである。常識道徳は哲学的 (philosophical) 直観による自明な倫理原理に依存的で、従属的な妥当性しか持たない。

常識道徳の原理は、一見自明なものと考えがちだが、この原理を適用しようとするとき、追加の原理を必要とする場合が生じる。例えば、「嘘をつくな」という常識道徳は例外的に許容される時があると考えられる場合がある。常識道徳に対する分析の要点は、「一般的に (commonly) 正しいと判断される行為を否定する傾向はなくても、なぜそうなのか、もっと深い説明が必要である」ということである²⁵。深い説明を必要とするときに働くのが功利原理であって、常識道徳は功利原理に依存するというのが依存性論証である。シュニーウィンドは、「常識道徳を構成する一連の道徳原理が完全に受容されるためには、功利主義が提案する第一原理も有効で拘束力がなければならない」というのが依存性論証の要点だと述べる²⁶。

また、体系化論証は、常識道徳の規則が自明な倫理原理と肯定的な関係を持つことが確認さ

²² Ibid., p. 45.; 邦訳は p. 71.

ロールズは、シジウィックの方法が反照的均衡に当てはまる根拠としてシュニーウィンドの論文を提示する。シュニーウィンドの論文は以下で説明する。

²³ Henry Sidgwick, “*The Methods of Ethics*”, Palgrave Macmillan UK, 1962, p. 422.

²⁴ J. B. Schneewind, ‘First Principles and Common Sense Morality in Sidgwick’s Ethics’, *Archiv für Geschichte der Philosophie*, Bd. 45, 1963, p. 139.

²⁵ Henry Sidgwick, “*The Methods of Ethics*”, p. 102.

²⁶ J. B. Schneewind, op. cit., p. 140.

れるとき、正当化されると主張する。功利主義に一般的になされる批判は、功利原理が常識道徳のような直観的な規則に反するという批判である。功利主義が常識道徳に反しないことを示すのが体系化論証である。

具体的には、功利原理が「場合によっては衝突する常識道徳の推論の原理を完全で調和のとれた体系にまとめる方法」を提供するかどうかを示す手続きを経る²⁷。ならば、この論証の全体的な手順は、我々の日常的な道徳的判断に対する体系的な反省から始まることになる。そのような反省を通じて「常識道徳の体系にさらなる発展が必要であることを証明し、功利主義の原理が体系の発展のために常識道徳が自然に訴えるようになる原理として提示されれば、功利主義の証明は完全なもの」となる²⁸。

もしそうであるならば、常識道徳の原理が依存し、これらの原理を体系化する常識道徳の推論の暗黙の前提を明らかにしなければならない。このとき、この自明な命題は、単なる意見とは区別されるものであり、常識道徳の規則よりもより高次的で抽象的なレベルでの自明な道徳原理である。それは「達成可能な確実性の最高水準」に到達するためのものであり、「信頼できる結論に我々を合理的に導く」推論の前提として機能する²⁹。シュニーウィンドは、常識道徳の内容が他の第一原理よりも功利原理を指すということが体系化論証の要点であり、常識道徳を我々が受容していることだけが正当化の条件であると述べる³⁰。

常識道徳は功利原理に依存するため、功利主義が常識道徳を説明することができ（依存性論証）、したがって、功利主義は常識道徳を体系化する総合の原理を提供する（体系化論証）というシジウィックの正当化方法は、ロールズが提案した反照的均衡の方法と非常に似ている。常識道徳は、我々の道徳的能力が歪んでいない熟考された判断を下すことができるようにする一連の原理を定式化したものといえる³¹。シジウィックはこの常識道徳の包括的な原理として功

²⁷ Henry Sidgwick, “*The Methods of Ethics*”, p. 422.

²⁸ 注 20。

²⁹ Henry Sidgwick, “*The Methods of Ethics*”, p. 338.

³⁰ J. B. Schneewind, op. cit., p. 140.

³¹ 常識道徳の定式化する原理の条件は次のようである。

- ・ 命題の言葉は明白かつ厳密でなければならない。
- ・ 命題の自明性は注意深い反省によって確認されねばならない。
- ・ 自明だとして受容された命題は相互に矛盾のないものでなければならない。
- ・ 私の保持する命題の真理性を他の同様に有能な判断者が拒否する程度において、その命題の真理性への私自身の信頼は縮減されるべきである。また、私が間違っているのではないかと疑うべき理由が、他の判断者が間違っているのではないかと疑うべき理由と同じくらい存在するならば、少なくとも一時的には、私は「中立的状態」に置かれるべきであることになる。

Katarzyna De Lazari Radek, Peter Singer, “*Utilitarianism: A Very Short Introduction*”, Oxford University Press, 2017, p. 24.; カタジナ・デ・ラザリ＝ラデク、ピーターシンガー、『功利主義とは何か』、岩波書店、2018、pp. 24-25。；邦訳は pp. 27-28。

利原理を提示し、常識道徳と功利主義の整合性を根拠に功利主義を正当化するのである。

ロールズが説明した反照的均衡の方法は、確かにシジウィックの方法にも妥当するように見える。『倫理学の方法』は、利己主義、直観主義、功利主義を順に提示しながら、それぞれの立場の長所と短所を考察する過程で構成されている。この点から、シジウィックの方法はロールズの反照的均衡と類似している。この三つの方法は、シジウィックが我々の常識道徳を分析する過程で提示される倫理理論だからである。

また、シジウィックの功利原理を直観主義あるいは常識道徳の葛藤を解消し、それらを補完する総合原理と見れば、シジウィックが反照的均衡を通じて直観主義と功利主義の調和を目指したと考えることができる。もちろん、シジウィックが反照的均衡という用語を明示したわけではないが、彼の功利主義の正当化は明らかにロールズが提案した方法と同様の過程を含んでいる。

3.2 シンガーによる『倫理学の方法』の解釈

ロールズがシジウィックの方法は反照的均衡の方法であると見なしたのとは異なり、シンガーはシジウィックは反照的均衡の方法を使っていないと主張する。シジウィックは、反照的均衡のように道徳的判断の集合である常識道徳に依存する整合的な方法を使ったのではなく、第一原理を基準に立てる基礎づけ主義者に属するということである。

シンガーは、シジウィックの論証が現れる文脈を検討してみると、常識道徳といえる日常的な道徳判断が、功利主義のような理論の真理の基準として使われたわけではないと主張する。それらの判断は、真理を決定する基準とは無関係なもので、独立して導き出された結果に対する一種の確認として使われたのである。その方法は、特に功利主義を拒否し、常識道徳を支持する人々、つまり「直観主義者を説得するための手段として使われた対人論証 (ad hominem argument) に過ぎない」³²。

対人論証の一部として常識道徳に訴えることでシジウィックの正当化方法を限定して解釈するシンガーは、ロールズの反照的均衡の方法と根本的に異なる方法が用いられていると解釈する。反照的均衡は、常識道徳への訴えを功利主義の妥当性に対する究極のテストとして認める一方、対人論証というシンガーの解釈は、常識道徳の訴えが妥当性とは無関係な手段的な意味だけを持つと考えられる。シンガーの対人論証の解釈によれば、シジウィックが常識道徳を活用する場合に直観主義者を説得しているのであって、哲学的に正当化を試みているわけではない。

シンガーがシジウィックの正当化方法を対人論証として解釈する主な理由の一つは、『倫理学の方法』の目的である。シジウィックは自分の第一目的が倫理学の第一原理を確立すること

³² Peter Singer, 'Sidgwick and Reflective Equilibrium', p. 498.

ではないことを明らかにしており、読者が実践的な結果ではなく、倫理学の方法そのものに注目してくれることを望んでいる³³。これによれば、シジウィックの『倫理学の方法』は単なる調査作業 (investigatory work) であり、特定の道徳理論を正当化するための試みではなく、我々が持っている常識道徳がどのような特徴をもつかを記述するための試みである。

シジウィックの方法が反照的均衡ではないもう一つの根拠は、シジウィック自身が「直観主義に基づいた功利主義者である」ことを明らかにしたことにある³⁴。シジウィックは一般的幸福を目指す最高の規則が拘束力を持つためには、根本的な道徳的直観に依存するしかないことを認める³⁵。これはシジウィックが反照的均衡の方法についての実践者 (practitioner) というよりはむしろ基礎づけ主義者であることを端的に示している³⁶。

シジウィックが依存する根本的な道徳的直観は、ロールズが言う熟考された判断とは異なる意味を持つ。ロールズの熟考された判断は、シジウィックが提示した自明性の条件を満たさない。ロールズが言う熟考された判断は、むしろ常識道徳による判断に近い。シジウィックの根本的な道徳的直観の対象は、個々の行為や一般的な規則ではなく、非常に抽象的な自明な原理である。このような自明な道徳原理は「哲学的直観 (philosophical intuition)」であり、ロールズが言った熟考された道徳判断、すなわち「独断的直観 (dogmatic intuition)」とは区別される³⁷。したがって、哲学的な道徳的直観は、単純な道徳的直観の集合である常識道徳とは区別される。

シンガーは「シジウィックは結局、我々のどのような根本的な原理が直観的に明らかで確実なのかという慎重な熟考以外に頼るところがないことを認めるだろう。しかし、彼は道徳理論の妥当性を、我々の究極の直観との一致や、我々の特定の判断との一致という観点で定義して

³³ このように、私の批評家 (reviewer) の一人は、第3巻 (直観主義について) を単なる外部からの敵対的批判とみなしているようである。別の一人は、私の主な目的が「エゴイズムの抑制」であるという仮定で論文を構成した。3人目は、私の論考の主な議論が普遍的快樂主義の実証であるという印象 (らしい) で論文を書くまでに至ってしまった。私は、このような誤った批評を引き起こしたことを心配しており、この版では、その一因となったと思われる箇所を慎重に変更した。

Henry Sidgwick, “*The Methods of Ethics*”, Preface to the Second Edition, p. ix.

³⁴ Ibid., Preface to the Sixth Edition, p. xxi.

³⁵ これはシジウィックの理論の中で公理 (axiom) として表現される。シジウィックはこの公理に属する原理として正義 (justice)、熟慮 (prudence)、善行 (benevolence) の原理を提示する。このうち、善行の原理が功利主義の基礎公理となる。功利主義の擁護は、単純な道徳的直観の集合である常識道徳とは独立して自明な公理という根拠から主張されることができると考えることができる。

³⁶ Katarzyna De Lazari-Radek, Peter Singer, “*The Point of View of the Universe: Sidgwick and Contemporary Ethics*”, Oxford University Press, 2016, p. 110.

³⁷ 独断的直観主義では、常識道徳の一般的な規則が公理 (axiom) として受け入れられる一方、哲学的直観主義は常識道徳が自ら提供しない哲学的基礎を探そうとする。その基礎は、現在の規則が演繹されることができ、より絶対的で否定しがたい真で明白な一つまたはそれ以上の原理である。

Henry Sidgwick, “*The Methods of Ethics*”, p. 102.

いない」と主張する³⁸。

シンガーによれば、ロールズとは異なり、シジウィックは哲学的直観主義の立場をとることによって、否定できない根本的な第一原理の確固たる基礎から正当化を始めている。ロールズは熟考された判断によって道徳理論の妥当性が多様化するという意味で主観主義に該当するが、シジウィックは哲学的直観主義者として主観主義とは明確に区別される。

表1 シンガーが主張するロールズとシンガーのシジウィックの『倫理学の方法』解釈の差

	作業の性格	論証の性格	正当化の方法	正当化の原理
ロールズの解釈	正当化の作業	依存性論証 体系化論証	反照的均衡	常識道徳 (独断的直観) 功利原理
シンガーの解釈	調査の作業	対人論証 (ad hominem argument)	基礎づけ主義	直観に基づく公理 (axiom) (哲学的直観)

シジウィックをどう解釈するかに関するロールズとシンガーの立場の違いは異なる結果を導く。まず、ロールズはシジウィックの作業を一種の正当化の作業として見なしたということである。常識道徳が功利主義を正当化できると主張するには、常識道徳がすでに正当化されていなければならない。しかし、常識道徳がそれ自体で正当化されるためには、すべての人が共通の直観を持っていることを前提にしなければならない。しかし、ハイトとグリーンが論じたように、すべての人が共通の直観を持っているとみなすのは難しい。

また、反照的均衡を経ない熟考された判断は、正当化されていない状態に属する。このときの反照的均衡を経ない熟考された判断は、正義感覚には基づいているが、明確な意味での熟考を経たと考えることはできない。そうすると、熟考された判断は正当化の出発点としての役割を果たすことができない。反照的均衡では自分の信念を維持あるいは修正することが目的として提示されているが、少なくとも自分の信念を維持する場合には、いかなる正当性も持たないと主張することができる。

そして、シジウィックの方法を記述的な方法として解釈する場合、常識道徳はそのまま正当化されない。常識道徳と常識道徳から導き出した原理は異なる性格を持つ。シジウィックの『倫理学の方法』において、常識道徳は重要な要素であるが、常識道徳と独立して正当化できる自明な原理を提示する。この場合、常識道徳自体に正当性は与えられない。常識道徳が衝突する場合、正当性は常識道徳ではなく第一原理から問われるべきであり、すべての人が共通の直観を持っていることを前提にする必要はない。

しかしロールズの場合、最初の熟考された判断をそのまま使っているため、正当化すること

³⁸ Peter Singer, 'Sidgwick and Reflective Equilibrium', pp. 514-515.

ができない。少なくともシジウィックの場合、熟考された判断と独立した公理を提示することでこの問題を回避することができる。私は以上で論じたことを踏まえ、結論として、反照的均衡は一種のジレンマに陥ると考える。反照的均衡を正当化の方法として使う場合、独断的直観主義を擁護しなければならず、記述的な方法として使う場合、自然主義の誤謬に陥る。

4. 科学理論と倫理理論の違い

第3章では主に熟考された判断に含まれる直観に焦点を当てて反照的均衡を批判した。反照的均衡を正当化の方法として使う場合、直観主義に属すると解釈することができる。しかし、シンガーの批判が正しく、反照的均衡が直観主義に属するとしても、倫理で全く擁護できないわけではない。ロールズ以降の反照的均衡において、直観に訴える主張がないわけではないからである³⁹。

しかし、反照的均衡が記述的な作業に属し、自然主義の誤謬に陥ることは否定しにくいと考えられる。第2章で論じたように、ロールズの反照的均衡が道徳理論の正当化を母語の文法性を明らかにする作業に例えることは、反照的均衡の方法を記述的に解釈する余地を残す。この作業の目標が原理を定式化することではなく、文章を認識する能力を特徴づけることであるとすれば、我々に文法規則に従えと主張することはできない。

ロールズの比喩によれば、道徳理論の正当化の作業は、我々が下す判断を観察して記述することと似ているように見える。もしそうなら、熟考された道徳的判断は、記述的な作業である反照的均衡に含まれる観察データと見ることができる。この章では、科学と倫理の違いについてのシンガーの立場を論じ、なぜ記述的な作業が倫理に適用できないのかを論じる。この説明は、観察データを倫理でどのように使うべきかについての答えとなる。また、この答えは、観察データとして熟考された判断にも適用できる。

4.1 シンガーのウィルソン批判

シンガーは、科学と倫理の違いを説明するためにウィルソンの主張を批判する。ウィルソンは既存の社会進化論者とは異なり、進化から倫理的価値を導き出すことができないという事実をよく認識していた。しかし、少なくともウィルソンが科学と倫理を何らかの形で関連づけようとしていることは明らかなので、ウィルソンに言及する。シンガーは「あらゆる倫理的主張

³⁹ デポールの場合、より広い反照的均衡 (wider reflective equilibrium) を主張し、ここで平衡状態に達したときの直観を最終状態直観 (end state intuition) と呼ぶ。より広い反照的均衡では、道徳哲学だけでなく、すべての背景理論における均衡状態を達成することが目的である。

詳細は DePaul, M., "Methodological Issues: Reflective Equilibrium", in: C. Miller (ed.), *The Continuum Companion to Ethics*, New York: Continuum, 2011, pp. ixv-cv.

や多くの政治的行為の源泉となっている人間的な諸価値の起源や意味自体が、遠からず科学的研究の対象になるだろう」というウィルソンの主張を批判する⁴⁰。シンガーはこの主張を3つに分けて次のように整理する。

1. 科学は、ある行為をすることによって現れるかもしれない究極的な結果についての新しい知識を生み出すことができる。
2. 科学は既存の倫理原理の実体を暴露するために使用することができる。
3. 科学は新しい倫理原理を生み出すことに貢献する⁴¹。

まず、1に関するシンガーの答えは次の通りである。ある行為や政策を実施することによって現れる究極的な結果に関する新しい事実が社会生物学を通じて知られることになっても、それが倫理原理に影響を与えることはできない。社会生物学からの検討を通じて新しい事実についての情報を確保することによって人々に異なる行為を要求することになるだろうが、この場合にも倫理原理自体は全く影響を受けないというのがシンガーの主張である。

シンガーは、事実に関する知識は倫理原理の適用に非常に重要であり、それに応じて我々は最善の情報を確保する努力をしなければならない。しかし、シンガーは「この努力が、生命倫理学を通じて倫理が「残さず」説明できるとか、倫理学者が必要ないということではなく、倫理原理は以前と変わらず固有の領域をそのまま維持することになる」と主張する⁴²。

たとえば、倫理原理と倫理原理を適用することは異なる。例えば、最も単純で古典的な形の功利主義では、影響を受けるすべての人の幸福を増進し、苦痛を減少させる行為を正しい行為とみなす。功利主義の基礎原理は、平和が戦争よりも正しいのか、真実が嘘に比べて良いのかなどについて、それ自体では何も教えてくれない。シンガーは「どんなに重要な新しい知識であっても、それはどのような制度や政策、または行為が幸福を最大化するかどうかを評価するのに役立つだけである。新しい知識は、功利原理そのものについてはいかなる疑問も提起できない」と主張する⁴³。

⁴⁰ Edward O. Wilson, “On Human Nature”, Harvard University Press, 1988, p. 5., : E・O・ウィルソン, 『人間の本性について』, 思索社, 1980, p. 19。

ウィルソンは価値に対しても社会生物学的に解釈し, 「諸々の価値基準は, 人間の遺伝子プール (gene pool) にどんな効果を及ぼすかに応じて, 必然的に束縛をこうむることになるはずなのだ」と主張する。

Ibid., p. 167.; 邦訳は p. 247。

⁴¹ Peter Singer, “The Expanding Circle”, Princeton University Press, 2011, p. 62-63.

⁴² Ibid., p. 68.

⁴³ Ibid., p. 64.

シンガーは、科学が倫理原理に影響を与えられないということが、義務論的倫理でより顕著に現れると主張する。義務論的倫理原理は、その原理に従うことによって現れる結果とは無関係に無条件的な命令を下し、たとえ何らかの災厄がもたらされることが生物学からの研究で明らかになったとしても、その原理自体は全く修正することが不可能だということである⁴⁴。

次に2に関して、シンガーは科学を通じた倫理の実体への暴露効果を検討する。シンガーは、生物学的検討によって「自然法」理論の擁護者や倫理的絶対論者が説得力を失うことになる主張する。なぜなら、倫理原理が我々の進化史から結果的に生じた生物学的適応の産物に過ぎないのであれば、「自然法だから」という議論や、道徳が絶対性を持つという主張が失敗してしまう⁴⁵。これは自然主義の誤謬に陥るからである。

また、倫理原理の実体を暴露する説明は、生物学以外にも文化史的な検討を通じて行うことができる。例えば、人間の生命の尊厳を強調する西洋の倫理的伝統は、人間だけが神の形相によって創られ、不滅の魂を持っていると把握するキリスト教的遺産だと説明できる。シンガーによると、このような説明は、人間の生命だけが尊いという信仰の幻想を崩すのに役立つ⁴⁶。これは文化的遺産に過ぎないからである。

最後に、3に関して、シンガーは科学から倫理的価値を導出する可能性を考察する。端的に言えば、シンガーはこれに対して否定的な立場をとる。事実と価値は分離され、これを無視する場合、我々は自然主義的誤謬を犯すことになる。シンガーは、「事実がいくら多く蓄積されても、価値が介入しなければ、我々は行為する理由を持たない」と主張する⁴⁷。価値は我々に行為する理由を提供するのに対し、事実はそうでない。

つまり、価値は我々に行動する理由を提供するのに対し、事実はそうではない。例えば、誰かが「寄付をすべきであることは認める。しかし、私は今後も寄付をするつもりはない」と言う場合、実質的に寄付の価値を認めていないと考えることができる。もし何かをするために何らかの価値を持つということが何の影響力も行使しなければ、価値はその重要性を失うことになる。

それに比べて、事実そのものは行為の理由を提供しない。たとえ事実が多く蓄積されても、それは私が価値を受け入れるのに役立たず、また、私が何をすべきかについての結論を受け入れることにも影響を与えることができない。例えば、私がお金をどのように使うことができるか（貯金、寄付、食事など）について様々な事実が与えられている。その中でどのような選択をするかは、これらの事実に対して私がどのような価値を与えているかによって変わる。

⁴⁴ Ibid., p. 67.

⁴⁵ Ibid., p. 69.

⁴⁶ Ibid., p. 72.

⁴⁷ Ibid., p. 75.

このように、事実は何に価値があるかを私に教えてくれない。一方、様々な選択肢の中から何を選ぶかには、私の価値が反映される。事実は私が価値あると思うものについて教えてくれるものがない。シンガーは、「事実と価値のギャップは、選択のための命令を下すことができないということにある」と主張する⁴⁸。

4.2 反照的均衡における記述と当為の問題

科学と倫理の区分は、反照的均衡を批判する要素として使用できる。反照的均衡における道徳理論の正当化の作業は、我々が下す判断を観察して記述することと類似しているからである。もしそうなら、熟考された判断は、記述的な作業である反照的均衡に含まれる観察データと見ることができる。

前述したように、事実と価値は分離しており、この違いを無視する場合、我々は自然主義の誤謬に陥ることになる。我々が何らかの道徳判断を下すと仮定した場合、熟考された判断は観察データに過ぎない。観察されたデータとして、我々は自分が持っている道徳能力によって、どのような行為が道徳的であるかを判断できると考えることができる。しかし、我々がそう判断したという事実は、その判断が倫理を正当化できるという結論を導くものではない。

例えば、反照的均衡の方法によって「寄付をすることが全体の快樂を増進するため、寄付をすべきである」という判断をしたとしよう。この判断は、様々な倫理原理を熟考して下した判断といえる。しかし、この判断は「反照的均衡の過程を経て、寄付をすることが全体の快樂を増進するため、寄付をすべきである」という判断を下したという事実を示しているに過ぎない。

この場合、観察された事実からというより、全体の快樂を増進することが功利主義の立場から正当化されるため、寄付をすることが倫理的行為として正当化されると考えることができる。ならば、この判断が倫理的かどうかを判断するには、観察された事実そのものとしての判断ではなく、一つの倫理原理として功利主義に訴えなければならない。

このように、ある個人あるいは集団は、ある事柄について道徳的判断を下すとき、複数の道徳理論を考慮し、反照的均衡が要求する均衡状態に至るかもしれない。しかし、自分あるいは集団の判断は観察された事実には過ぎない。ロールズは反照的均衡を記述的な作業として考えるからである。反照的均衡は、我々が一般的に道徳的判断を下す過程を説明できるかもしれないが、それが倫理的に正しいかどうかについては説明してくれないと考えることができる。

私は結論として、もしシンガーの立場が正しければ、反照的均衡の方法は科学と倫理の違いのように、1と3の前提が間違っているため、正当化することができないと考える。我々はより良い倫理的決定のために反照的均衡の方法を使うことができる。しかし、反照的均衡の方法を使うからといって、その決定が倫理的にすべて正当化されるとは言えない。

⁴⁸ Ibid., p. 76.

5. 結論

これまで、シンガーの立場からロールズが提示する反照的均衡を批判した。反照的均衡は大きく分けて二つの理由で正当化できない。まず、反照的均衡は熟考された判断に含まれている正義感覚によって直観主義に陥る可能性がある。熟考された道徳的判断に含まれる道徳的直観の要素は、その判断が持つ信頼性に疑問を投げかける。反照的均衡で熟考された道徳判断が持つ直観の要素は除去されるか、追加の方法を通じて補完する必要がある。

第二に、反照的均衡は我々の道徳能力を説明する方法として提示されたという点で、記述的に解釈する余地を残す。しかし、反照的均衡を記述的に解釈すると、自然主義の誤謬に陥ることになる。事実是我々が何らかの選択をする際に熟考する要素として考えることができるが、行為の理由を提供することができない。反照的均衡は、我々が一般的に道徳判断を下す過程を説明できるかもしれないが、それが倫理的に正しいかどうかについては説明してくれない。

結論として、我々はより良い倫理的決定のために反照的均衡の方法を使うことができる。しかし、反照的均衡の方法を使うからといって、その決定が倫理的にすべて正当化されるとは言えない。

(きむ うにょん・哲学倫理学研究室)

参考文献

- DePaul, Michael R., Two Conceptions of Coherence Methods in Ethics, *Mind*, Vol. 96, No. 384, 1987, pp. 463-481.
- , *Methodological Issues: Reflective Equilibrium*, in: C. Miller (ed.), *The Continuum Companion to Ethics*, New York: Continuum, 2011.
- Greene, Joshua, *Moral Tribes: Emotion, Reason, and the Gap Between Us and Them*, Penguin Press, 2013.
- Haidt, Jonathan, *The Righteous Mind: Why Good People are Divided by Politics and Religion*, Vintage, 2013.
- Lazari-Radek, Katarzyna De, Singer, Peter, *The Point of View of the Universe: Sidgwick and Contemporary Ethics*, Oxford University Press, 2016.
- , *Utilitarianism: A Very Short Introduction*, Oxford University Press, 2017.; カタジナ・デ・ラザリ＝ラデク、ピーター・シンガー、『功利主義とは何か』、岩波書店、2018.
- Schneewind, J. B., First Principles and Common Sense Morality in Sidgwick's Ethics, *Archiv für Geschichte der Philosophie*, Bd, 45, 1963, pp. 137-156.
- Sidgwick, Henry, *The Methods of Ethics*, Palgrave Macmillan UK, 1962.
- Singer, Peter, *The Expanding Circle: Ethics, Evolution, and Moral Progress*, Princeton University Press, 2011.
- , Sidgwick and Reflective Equilibrium, *The Monist*, Vol. 58, No.3, 1974, pp. 490-517.
- , Ethics and Intuitions, *The Journal of Ethics*, 10 Vol. 91, Iss. 3-4, 2005, pp. 331-352.
- Rawls, John, *A Theory of Justice*, Revised Edition, Harvard University Press, 1999; ジョン・ロールズ (2010),

『正義論』，紀伊国屋書店。

Wilson, Edward O., *On Human Nature*, Havard University Press, 1988, ; E・O・ウィルソン, 『人間の本性について』, 思索社, 1980.